

<心理学者テスト>

©2022sakurakosensei 転載・転売・流用・譲渡禁止

該当する人物名を に入れます。

	生涯発達心理学の概念を提起し、定着させることに貢献した。
	視覚的断崖において、乳児の三次元的な知覚の発見をした。ギブソンと研究を行う。
	新奇場面法（ストレンジ・シチュエーション法）で、乳児と母親との実験を行った。それにより、「回避型」「安定型」「両価型（アンビバレント型）」「混乱型」の愛着のタイプを報告した。
	社会的比較過程の理論を提唱し、人は自分より劣った人物に対する下方比較や、自分より優れた人物に対する上方比較を行うことを示した。
	チンパンジーによる洞察学習の実験を行った。思考錯誤して解決するのではなく、洞察（ひらめく）ことによって問題解決をするという思考を提唱した。
	内発的動機づけは、自分はここまでならやれるという確信である自己効力感（セルフ・エフィカシー）をもつためにも重要な要因であるとした。また、学習の成立において、本人の直接経験は必ずしも必要ではなく、他者の行動を観察することにより観察学習（モデリング）が成立しえるとした。
	新生児は、人が話しかけるなどすると、その発話のリズムに合わせて身体の一部を動かす同期行動（エントレインメント）を示すことを実験した。
	子どもがもつ、生後5～6週間ごろから、養育者が自分に対し関心を持っているかどうかを判断する能力を間主観性とよんだ。

	老年期を、老年前期、老年後期、超高齢期に区分した。さらに老年期の適応の視点から、パーソナリティを「統合型」「防衛型」「依存型」「不統合型」に分類した。
	情緒の分化を、新生児から2歳まで分類した。
	幼児期の遊びの形態の分類を、「目的のない行動」「一人遊び」「傍観」「平行（並行）遊び」「連合遊び」「協同（共同）遊び」とした。
	社会生活のある場面でどのような表情の表出が期待されるかに関して、文化により異なる規則があると考え、これを表示規則とした。 基本情動として、喜び、驚き、おそれ、嫌悪、怒り、悲しみの6つを示した。
	生涯を乳幼児期から老年期までの6つの段階に区分し、ある段階から次の段階へ進むために発達課題があることを提唱した。
	他因子説によって、言語理解、語の流暢性、数、空間的能力などの7つの基本的認知能力を提唱し、知能を、本能的な調整を抑制する能力や、それを個人の利益になるように行動を変える意思の能力などとした。
	2人の実験により、奥行き知覚は、生後3か月ごろには可能になり始めることが示された。
	道徳性を正義と公正さであるとし、児童から成人をも含む道徳性の発達段階を提起した。
	新生児のガラガラや光などの刺激に対する反応を評価することにより、新生児行動評価を考案した。
	欲求階層説として、生理的欲求→安全の欲求→所属と愛情の欲求→社会的承認の欲求→自己実現の欲求の段階を示した。

	一卵性双生児による実験研究。本来もつ能力の内的な成熟のためには、その訓練や学習を受け入れるために最もふさわしい心身の準備性（レディネス）が出来上がるのを待ち、そのうえで学習や訓練などを行うのがよいとした。
--	--

	選好注視法で、乳児の注視時間を調べ、人間は誕生後のごく初期から視覚刺激の見分けが可能であり、人間の顔に対する明らかな好みがあることを示した。
--	--

	自然との関わりの中で、未知なものに驚いたり、美しいものに感動したりする経験を「センス・オブ・ワンダー」と名付けた。
--	---

	子どもの気質を9つの特性で分類し、「扱いやすい子」「扱いにくい子」「立ちあがりが遅い子」の3タイプに分類した。
--	---

	カモなどのひな鳥が、卵からかえって最初に目にした動くものを親とみなして追従し（愛着行動を示し）、それが成長してからも恒久的に続くという現象を発見し、インプリンティング（刷り込み・刻印づけ）と名づけた。
--	--

	子どもが自力で解決できる水準を現在の発達水準とし、これと、自力では解決できないけれど、他者からの援助があれば解決できる水準との間を、発達の最近接領域とよんだ。 また、子どもは最初、主に他者とのコミュニケーションに使われる音声言語である外言を用いるが、やがて自分自身の頭の中で話したり考えたりする言語である内言に発展するとした。
--	--

<正解>

バルテス	生涯発達心理学の概念を提起し、定着させることに貢献した。
ウォーク	視覚的断崖において、乳児の三次元的な知覚の発見をした。ギブソンと研究を行う。
エインズワース	新奇場面法（ストレンジ・シチュエーション法）で、乳児と母親との実験を行った。それにより、「回避型」「安定型」「両価型（アンビバレント型）」「混乱型」の愛着のタイプを報告した。
フェスティンガー	社会的比較過程の理論を提唱し、人は自分より劣った人物に対する下方比較や、自分より優れた人物に対する上方比較を行うことを示した。
ケーラー	チンパンジーによる洞察学習の実験を行った。思考錯誤して解決するのではなく、洞察（ひらめく）ことによって問題解決をするという思考を提唱した。
バンデューラ	内発的動機づけは、自分はここまでならやれるという確信である自己効力感（セルフ・エフィカシー）をもつためにも重要な要因であるとした。また、学習の成立において、本人の直接経験は必ずしも必要ではなく、他者の行動を観察することにより観察学習（モデリング）が成立しえるとした。
コンドンとサンダー	新生児は、人が話しかけるなどすると、その発話のリズムに合わせて身体の一部を動かす同期行動（エントレインメント）を示すことを実験した。
トレヴァーセン	子どもがもつ、生後5～6週間ごろから、養育者が自分に対し関心をもっているかどうかを判断する能力を間主観性とよんだ。
ニューガーデン	老年期を、老年前期、老年後期、超高齢期に区分した。さらに老年期の適応の視点から、パーソナリティを「統合型」「防衛型」「依存型」「不統合型」に分類した。

ブリッジス	情緒の分化を、新生児から2歳まで分類した。
パーテン	幼児期の遊びの形態の分類を、「目的のない行動」「一人遊び」「傍観」「平行（並行）遊び」「連合遊び」「協同（共同）遊び」とした。
エクマン	社会生活のある場面でどのような表情の表出が期待されるかに関して、文化により異なる規則があると考え、これを表示規則とした。 基本情動として、喜び、驚き、おそれ、嫌悪、怒り、悲しみの6つを示した。
ハヴィガースト	生涯を乳幼児期から老年期までの6つの段階に区分し、ある段階から次の段階へ進むために発達課題があることを提唱した。
サーストーン	他因子説によって、言語理解、語の流暢性、数、空間的能力などの7つの基本的認知能力を提唱し、知能を、本能的な調整を抑制する能力や、それを個人の利益になるように行動を変える意思の能力などとした。
バンクスト サラパテク	2人の実験により、奥行き知覚は、生後3か月ごろには可能になり始めることが示された。
コールバーグ	道徳性を正義と公正さであるとし、児童から成人をも含む道徳性の発達段階を提起した。
ブラゼルトン	新生児のガラガラや光などの刺激に対する反応を評価することにより、新生児行動評価を考案した。
マズロー	欲求階層説として、生理的欲求→安全の欲求→所属と愛情の欲求→社会的承認の欲求→自己実現の欲求の段階を示した。
ゲゼル	一卵性双生児による実験研究。本来もつ能力の内的な成熟のためには、その訓練や学習を受け入れるために最もふさわしい心身の準備性（レディネス）が出来上がるのを待ち、そのうえで学習や訓練などを行うのがよいとした。

ファンツ	選好注視法で、乳児の注視時間を調べ、人間は誕生後のごく初期から視覚刺激の見分けが可能であり、人間の顔に対する明らかな好みがあることを示した。
------	--

レイチェル・カーソン	自然との関わりの中で、未知なものに驚いたり、美しいものに感動したりする経験を「センス・オブ・ワンダー」と名付けた。
------------	---

トマスとチェス	子どもの気質を9つの特性で分類し、「扱いやすい子」「扱いにくい子」「立ちあがりが遅い子」の3タイプに分類した。
---------	---

ローレンツ	カモなどのひな鳥が、卵からかえって最初に目にした動くものを親とみなして追従し（愛着行動を示し）、それが成長してからも恒久的に続くという現象を発見し、インプリンティング（刷り込み・刻印づけ）と名づけた。
-------	--

ヴィゴツキー	<p>子どもが自力で解決できる水準を現在の発達水準とし、これと、自力では解決できないけれど、他者からの援助があれば解決できる水準との間を、発達の最近接領域とよんだ。</p> <p>また、子どもは最初、主に他者とのコミュニケーションに使われる音声言語である外言を用いるが、やがて自分自身の頭の中で話したり考えたりする言語である内言に発展するとした。</p>
--------	---